台大日本語文研究第 7 期
2004 年 12 月，頁 1~24
本文 2004.9.27 收稿，2004.10.25 通過刊登

〈夢應鯉魚〉的典據及其中心思想

趙 姬玉*

摘 要

拙論採用與原據對照比較的方法,探討分析〈夢應鯉魚〉一文。〈夢應鯉魚〉是《雨月物語》所收九個短篇小說中的第四篇。本篇與其他八篇同爲典型的「翻案」(仿作)文學作品，是江戶時代怪異文學巨擘上田秋成援引中日兩國古典文學，以仿作的筆法寫成的短篇作品。不可思議的情節、夢幻浪漫的情境、優美的遣詞用字、對人性偏執的刻劃入微，作品背後的意涵，凡此皆爲本篇膾炙人口，備受日本近代及現代文豪推崇的主因。

〈夢應鯉魚〉的主要藍本是〈薛錄事魚服証仙〉還是〈魚服記〉?眾說紛紜，各見其理。本論文首先討論前人的各種說法，然後逐字逐句比對〈夢應鯉魚〉和〈薛錄事魚服証仙〉以及〈魚服記〉之間的類似度，掌握主要典據之後，再進行仿作與原據之間異質性與同質性的比較。透過這些分析，相信對探討上田秋成的創作技巧、創作意圖等等有所助益。

關鍵詞: 夢應鯉魚、魚服記、魚服証仙、雨月物語、仿作

臺灣大學學術期刊資料庫

* 國立台灣大學日本語文學系教授

A Study: The Origins and Main Idea of *Muo-no-rigyo*

Chao, Chi-yu*

Abstract

This dissertation tries to discuss Muo-no-rigyo, the fourth of the nine short novels in Ugetsu-monogatari, by adopting the contrast and comparison of the origins. This story, same as the other eight ones, is a typical adaptation written by the master of strange literatures in Edo era—Ueda Akinari, depending on both Chinese and Japanese classics. The fantastic plot, romantic atmosphere, beautiful words, description of humanity, and so on, all make this story popular and well-known.

What is the basis of Muo-no-rigyo? Is it XueLuShiYuFuZhengXian or YuFuJi? Each thesis has its reasons to claim. This paper, at first, discusses the claims; then, compare them words by words. After confirm the main basis, continue to compare and contrast between the adaptations and the origins; by this progression, certainly we can know more about Ueda Akinari's writing techniques and his intention of writing this story.

Key words: Muo-no-rigyo,Yu-fu-ji,Yu-fu-zheng-xian,Ugetsu-monogatari, adaptation

臺灣大學學術期刊資料庫

*Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

「夢應の鯉魚」の典拠とモチーフ

趙 姫玉*

要　旨

小論では原典との対照比較という手法で「夢応の鯉魚」を考察する。『雨月物語』の第四篇となっている「夢応の鯉魚」は、他の諸篇と同じように、典型的な翻案作品であり、上田秋成が 中日の古典を引用、翻案しながら書き上げた傑作短編である。本篇が人口に膾炙した作品となり、近現代の文豪たちから高く評価されてきたのは、その不思議な筋書き、夢幻的な場面、優美な文体、人間性に対する精緻な観察、作品の裏に潜む寓意などによっている。

「夢応の鯉魚」の原典については、「薛錄事魚服証仙」なのか、それとも「魚服記」なのか、論が分かれている。拙論では、まず諸説に検討を加え、それから用語文章などを逐一に比較し、その間の類似性を見極めた上で、典拠を確かめた。さらに、本作品と原典との間に見られる同質性と異質性についても、詳しい分析を試みた。拙論の考察が、上田秋成の創作手法ないし創作意図を解明する一助となることを期待する。

キーワード：夢応の鯉魚、魚服記、魚服証仙、雨月物語、翻案

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台湾大学日本語文学系教授

「夢應の鯉魚」の典拠とモチーフ

趙 姫玉

一、始めに

翻案小説の場合、その典拠を確かめ、翻案者の典拠に対する受容の態度を通じて、翻案ぶりあるいは独創性を研究することは重要な意義を持っている。「夢應の鯉魚」も『雨月物語』の他の諸篇と同じく、その典拠をめぐって詳しい研究がなされてきた。前川来太が天明三年（１７８３）に書いた『近古奇談諸越の吉野』の題詞によると、「雨月物語之夢應鯉魚的話、是向醒世恒言中訳得來的」とあり[1]、「夢應の鯉魚」の典拠は、『醒世恆言』第二十六巻の「薛録事魚服証仙」（以下、「魚服証仙」と略称する）とされている。この説に対し、藤井乙男、鈴木敏也、山口剛の諸氏は、否定する立場を採られている[2]。

一方、本篇の典拠を『古今説海』の「魚服記」と『醒世恆言』の「魚服証仙」の両方に求める立場もある。たとえば、後藤丹治氏は「夢應の鯉魚の原拠」の中で、秋成は「魚服証仙」も、「魚服記」も参考にしたと指摘されている[3]。そして重友毅氏は、たとえ「魚服記」を参照したとしても、「魚服証仙」こそ主な典拠である、と主張されている[4]。後藤氏の説はかなり説得力があるが、その論証には充分と思われないところもあるので、小論では、文章の構成と言葉遣いの比較対照を通じ、「夢應の鯉魚」の典拠をもう一度検討してみたい。

---

[1] この本については樋口慶千代氏や後藤丹治氏は「天明二年」とされているが、諸説のおおむねは「天明三年」となっている。なお、寛政四年の「凧草紙」の序にも『英草紙』『雨月物語』などの読本の典拠についての指摘がある。

[2] たとえば、山口剛『江戸文学研究』（東京堂、１９３３年１０月）４７７頁参照。

[3] 後藤丹治「「夢應の鯉魚」の原拠」（『国語国文』２１巻９号 １９５２年１０月）。

[4] 重友毅「翻譯翻案文學としての近世小説―特に怪談物を中心として」（『国語国文學』、１５巻４号、１９３８年４月）。

臺灣大學學術期刊資料庫

二、「魚服記」と「薛録事魚服証仙」との比較

「魚服記」は、明の陸楫が編纂した説話集『古今説海』の説淵・辰巻三十五に収められている[5]。この話は、宋の李昉が撰集した『太平広記』第四百七十一話の「薛偉」と、内容がほとんど同じである。「薛偉」の話は、唐李復言が著した『続玄怪録』からとったものなので、「魚服記」も『続玄怪録』または『太平広記』から引用したものと考えられる。浅野三平氏の紹介によると、静嘉堂文庫所蔵の『雨月物語』写本の「夢應の鯉魚」の箇所に、「善按　林羅山子ノ怪談全書ニ説海ヲ引テ訳シ出す薛偉ト云人ノ話ナリ　唐乾元二年ニ云々」という書き入れがあるという[6]。なお、林羅山の『怪談全書』二の巻の「魚服」は「魚服記」の翻訳で、秋成がそれを参考にした可能性もある。これに対し、「魚服証仙」は明の馮夢龍の書いた『醒世恒言』巻二十六に収められているものである。話の主人公も、筋そのものも、「魚服記」あるいは『太平広記』の「薛偉」と大体同じであるものの、物語の構成から言えば、スケールが大きい上に、より複雑でもある。怪異性に関しては、「夢應の鯉魚」と全く同じと言えるが、道教思想、神仙談と結びついている点では、「夢應の鯉魚」と違う。

「夢應の鯉魚」を執筆するにあたり、秋成はいったい、『太平広記』の「薛偉」を参考にしたのか、それとも『続玄怪録』の「薛偉」を参考にしたのか、あるいは「魚服記」を参考にしたのか、あるいは「薛録事魚服証仙」を参考にしたのか。この問題を明らかにしようとするのが、本節の目的である。

「夢應の鯉魚」の冒頭部分は、「むかし延長の頃、三井寺に興義という僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。……其繪と俳諧とゝもに天下に聞こえけり。」というふうに、主人公の紹介から書き出している。この点については、「魚服証仙」も「魚服記」

---

[5] 新文豊出版公司編集部編『叢書集成新編』（１９８６年２月）に収録されている。

[6] 浅野三平「「夢應の鯉魚」について」（『上田秋成の研究』、桜楓社、１９８５年２月、２６５頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

も似通っている。「魚服証仙」の方が、「話説唐粛宗乾元年間有個官人姓薛名偉，呉縣人氏，曾任文寶末年進士，初任扶風縣尉，名聲頗著。」と、かなり詳しい紹介になっているのに比べ、「魚服記」は「薛偉者乾元二年，任涇州縣主簿，與丞鄒滂尉雷濟，斐察同時」、「薛偉」は「薛偉者唐乾元元年任蜀州青城縣主簿與丞鄒滂尉雷濟裴寮同時」と、簡単な紹介に止まっている。これを次のように示すことができる。

夢應の鯉魚――むかし延長の頃［時間］
　　三井寺に興義という僧ありけり［主人公］
　　絵に巧なるをもて名を世にゆるされけり［描写］
魚服証仙――話説唐粛宗乾元年間［時間］
　　有個官人姓薛名偉呉縣人氏［主人公］
　　名聲頗著 ……［描寫］
魚服記――薛偉者［主人公］
　　乾元三年［時間］……

右を見ても分かるように、時間→主人公の登場→描写という順序から言っても、「名を世にゆるされけり」と「名聲頗著」との類似から言っても、「魚服証仙」は「魚服記」よりも、「夢應の鯉魚」の方に接近している。これればかりでなく、興義の洒落な人柄を描写する部分に相当するところは「魚服記」には見当たらないが、「魚服証仙」には見出せる。これらの理由をもって、「夢應の鯉魚」の冒頭部分は「魚服証仙」からヒントを得たものと言えよう。しかし、偶然に一致している可能性もないではないので、さらに考察を進めることにする。

主人公が鯉になり、そして鯉の状態から再び生き返るまでの描写に関しては、「魚服記」は「夢應の鯉魚」と同じように、病気→生き返り→友人に怪異の体験談――鯉になっていろいろな体験をしたあと料理人に殺されることを語る、という構成になっている。ところが、「魚服証仙」の描写の仕方はこれとだいぶ違い、（七夕の節句）→病気→（妻がお寺参りして、夫の回復を祈る）→主人が鯉に化して、

臺灣大學學術期刊資料庫

料理人に殺される →生き返る→友人に怪異の体験を話す、ということになっている。つまり、括弧に囲まれている部分の描写は、「夢應の鯉魚」にも「魚服記」にもなかったのである。

魚になって経験したことを友人に話し、みんなを驚嘆させたのは当然である。そして、みんなが残りの鱠を湖の中に捨てたことは三者に共通している。しかし、話の結末は三者それぞれ異なっている。「夢應の鯉魚」では、主人公の興義が病を癒したあと、天寿を全うして亡くなったとなっており、弟子の成光の画技をもって興義の絶妙な画技を強調することで、話を結んでいる。「魚服記」の場合は、主人公がのちに華陽の官吏になったことで結ばれている。一方、「魚服証仙」の後日譚が一番長く、薛偉と彼の妻が二人とも仙人になって天界に昇った、という道教神仙譚になっている。

今まで述べてきたものを比較してみると、冒頭部分を除いて、「夢應の鯉魚」は、段落や文章の構成において、「魚服記」によく似ているし、内容も「魚服記」から引用したものがかなり見られ、しかも「魚服記」をそのまま直訳した部分が極めて多い。以下、対照する形で比較してみよう。「夢応の鯉魚」は「夢」、「魚服記」は「記」、「魚服証仙」は「証」とそれぞれ略記する。傍線部分は意味あるいは表現が一致する部分である。

（一）病に罹りて、七日を経て、忽ちに眼を閉じ（夢）
　　偉病七日忽奄然若往者（記）
　　熱了七日七夜、越加越重忽然一陣昏迷閉了眼去（証）
（二）心頭のあたりの微し暖かなるにぞ（夢）
　　心頭微暖（記）
　　胸前果有微微暖氣（証）
（三）三日を経にけるに（夢）
　　經二十日（記）
　　……（証）
（四）忽ち長嘘を吐きて（夢）

臺灣大學學術期刊資料庫

忽長噓起座（記）

……（証）

（五）我人事を忘れて既に久さし。幾日をか過しけん（夢）

吾不知人間幾日了（記）

我不知人事有幾日了（証）

（六）……鮮き鱠をつくらしめ給ふ、しばらく宴を罷めて寺に詣でさせ給へ、希有の物かたり聞えまるらん（夢）

……食鱠否、言吾已蘇、甚有奇事罷箸來聽也（記）

吃魚鮓……放下箸不要吃（証）

（七）蘇生の賀を述ぶ（夢）

……（記）

連叫恭賀恭喜（証）

（八）かの漁父文四に魚をあつらへ給ふ事ありや（夢）

勒司戸僕張粥求魚乎（記）

……（証）

（九）まことにさる事ありいかにしてしらせ給ふや（夢）

誠然、子何以知之（記）

事俱有的、但不知三爺何以知之（証）

（十）三尺あまりの魚（夢）

大魚（記）

三尺來長金色鯉魚（証）

（十一）碁を囲みておはす……桃の実の大いなるを啗ひつつ奕の手段を見る（夢）

奕碁、斐啗桃實（記）

……打雙陸、裴長官在旁吃桃子（証）

（十二）大魚（夢）

巨鯉（記）

大魚（証）

（十三）病にくるしみて堪へがたきあまり（夢）

當初疾困為熱所逼殆不可堪（記）

臺灣大學學術期刊資料庫

身上熱極便是頃刻也挨不過（証）

（十四）籠の鳥の雲井にかへるここちす（夢）

若籠禽檻獣之得逸（記）

如飛鳥辭籠（証）

（十五）杖に扶けられて、門を出づれば（夢）

求策杖而行（記）

提一條竹杖私離衙齋（証）

（十六）江の畔（夢）

江畔（記）

……（証）

（十七）幼より水に狎れたる（夢）

自幼狎水（記）

從幼學得泅水（証）

（十八）衣を脱去して、身を跳らして深きに飛入りつも（夢）

脱衣於岸跳身便入（記）

脫下衣裳向潭中洗澡（証）

（十九）　人の水に浮かぶは魚のこころよきにはしかず（夢）

人浮不如魚快（記）

人游到底不如魚健（証）

（二十）傍にひとつの大魚ありていふ（夢）

傍有一魚曰（記）

旁邊有個小魚卻覷著少府道（証）

（二十一）しばししして（夢）

未頃（記）

……（証）

（二十二）権に金鯉が服を授けて……。おのが身をかへり見れば（夢）

權充東潭赤鯉、聽而自顧（記）

權充東潭赤鯉、回顧身上（証）

（二十三）ひとつの鯉魚と化しぬ（夢）

臺灣大學學術期刊資料庫

已魚服矣（記）

全是一個金色鯉魚（証）

（二十四）急かにも飢えて（夢）

俄而飢甚（記）

肚中飢甚（証）

（二十五）其の餌はなはだ香ばし（夢）

其餌芳香（記）

只聞得餌香（証）

（二十六）心又河伯の戒を守りて（夢）

心亦知戒（記）

……（証）

（二十七）魚の餌を呑むべきとてそこを去る（夢）

乃呑其鉤乎舍之而去（記）

若呑了這餌，再去船傍（証）

（二十八）しばしありて飢ますます甚し（夢）

有頃飢益甚（記）

肚中又餓（証）

（二十九）遂に餌をのむ（夢）

遂呑之（記）

把口就餌上一合（証）

（三十）　たとへ此の餌を呑むとも（夢）

縱呑鉤（記）

便把他鉤了去（証）

（三十一）糸を収めて（夢）

收綸以出（記）

一掣掣將去（証）

（三十二）縄をもて我が腮を貫き、葦間に船を繋き（夢）

以繩貫我腮、乃繫于葦間（記）

一根草索貫了魚腮放在艙裡（証）

（三十三）大魚を見て人々大いに感させ給ふ（夢）

臺灣大學學術期刊資料庫

皆喜魚大（記）

……（証）

（三十四）膾手（夢）

鱠手（記）

廚役（証）

（三十五）両眼を左手の指にてつよくとらへ右手に礪ぎすませし刀をとりて俎盤にのぼし（夢）

方持刃喜而投我于機上（記）

把我放在砧頭上（証）

（三十六）聞きいれず（夢）

若不聞著（記）

……（証）

（三十七）終に切らるる（夢）

按吾頭於砧上而斬之（記）

一刀剁下頭來（証）

（三十八）人人大いに感異しみ（夢）

諸公莫不大驚（記）

……（証）

（三十九）口の動くを見ればさらに声を出す事なし（夢）

皆見其口動實無聞焉（記）

但見這魚口動而已那曾有什麽聲響（証）

（四十）残れる鱠を湖に捨てさせけり（夢）

棄鱠終身不食（記）

將魚鮓投入水中（証）

（四十一）これより病癒えて（夢）

自此平癒（記）

……（証）

臺灣大學學術期刊資料庫

「魚服証仙」は用語において、「夢應の鯉魚」に似ているところが少ないものの、秋成がそれを参考にしなかったと断言することはで

きない。一方、「魚服記」は内容においても、用語においても、「魚服証仙」よりずっと「夢應の鯉魚」に似通っている。思うに、秋成は「魚服記」を主要な参考、「魚服証仙」をその次の参考に、「夢應の鯉魚」を書いたのであろう。なお、『古今説海』の「魚服記」と『太平広記』の「薛偉」の描写は殆ど同じであるが、数箇所において言葉遣いが少し違う。例えば、（三十五）の「方持刃……」は「薛偉」においては「方持礪刃……」となっている。したがって、「薛偉」は「魚服記」より「夢應の鯉魚」に接近していると言ってもよかろう。

重友毅氏は、「夢應の鯉魚」の主人公興義が仮死の状態から覚めて、その間の不思議を語ろうとして迎えにやった平の助の一家の人々が来り訪れるなど、「魚服証仙」にしか見えない描写を数箇所も襲用していることをもって、「夢應の鯉魚」の主な典拠はやはり「魚服証仙」である、と論じられている[7]。重友説の影響かと思われるが、本篇の典拠を「魚服証仙」として解説したりする説もいくつかある。しかし、このような説は、右に挙げた対照比較表が正しい限り、賛成することはできない。「鱠」「啗」「桃実」「心頭」「微暖」「江畔」「狎水」「鱠手」「以縄貫我腮」「葦間」などの言葉の一致から見れば、やはり「魚服証仙」よりも「魚服記」あるいは「薛偉」の方が「夢應の鯉魚」のもっとも主要でかつ有力な典拠であるように思われる。

ところで、「夢應の鯉魚」を書くに当り、秋成はなぜ冒頭部分に「魚服証仙」を利用し、展開部分と結尾に「魚服記」を利用したのだろうか。この問題を解くことにより、秋成の翻案手法の一端を窺うことができるにちがいない。

全体的に見れば、「魚服証仙」は「魚服記」より内容が豊富で構造も複雑であると同時に、怪異談と神仙談の両方の面白みを持っている。しかし、文章としては、同じことの繰り返しで、文章が分かりにくい「魚服証仙」に比べ、「魚服記」は明快な展開で文章も分かり

[7] 重友毅「翻譯翻案文學としての近世小説―特に怪談物を中心として」（『国語国文學』、１５巻４号、１９３８年４月）。

臺灣大學學術期刊資料庫

やすい。これは、秋成が「魚服記」を主として利用した最大の理由と考えられる。

また、「魚服証仙」では、道家の神仙説話の要素がきわめて大きな比重を占めているが、道教を老子、荘子の説いている淡泊無為の道家思想として理解する当時の日本人にとって、中国の宋、元、明時代の道家神仙思想は分かりにくいし、受け入れ難いものだったかもしれない。もし、秋成が道教系統の説話あるいは神仙思想をそのまま「夢應の鯉魚」に取り入れたら、かえって物語の純粋性を破壊する恐れがある。だからこそ、秋成は「魚服証仙」を一部だけ参考にし、「魚服記」を主な典拠として、うまく日本的な怪異説話に作り換えたのである。冒頭部分に「魚服証仙」を利用したのは、「魚服記」のこの部分の描写が余りにも簡単すぎると考えたからかも知れない。

「菊花の約」「蛇性の婬」「夢應の鯉魚」の三話の原拠の存在があまりにもはっきりしているために、高田衛氏は、『雨月物語』の原拠主義の方法はあくまでも庭鐘の方法の延長線上にあると述べられている[8]。しかし、「魚服記」、「魚服証仙」だけでなく、秋成は作中の人物像の設定あるいは描写なども、他の中国の志怪伝奇および日本の説話、逸話などの先行文芸から借用したり、転用したりしたことは、すでに明らかにされている。たとえば中村幸彦氏によれば、僧興義のモデルは『浪速人傑談』の「蛇玉葛子明」であるという[9]。ちなみに「夢應の鯉魚」と「蛇玉葛子明」は次のような共通点を有する。

（イ） 二人とも画僧である。
（ロ） 蛇玉は特に鯉魚を書くのが上手なので、鯉翁の異名を持っている。
（ハ） どちらにも絵を求める人が多い。

[8] 高田衛「雨月物語の世界」（諏訪春雄、日野龍夫編『江戸文学と中国』、毎日新聞社、１９７７年２月、１５９頁）。
[9] 中村幸彦「秋成に描かれた人々」（『国語国文』、１９６３年６月）。

臺灣大學學術期刊資料庫

一方、斎藤純氏は、主人公のモデルを『太平広記』巻二百十四、夢四の「貫休」とされている[10]。「夢應の鯉魚」と「貫休」に見られる共通点は次の三点である。

（イ）興義と貫休はともに画僧である。
（ロ）二人とも夢から覚めたあと、夢の中で見たものを画いた。
（ハ）「貫休」には應夢羅漢という言葉があり、中国語の「應夢」は日本語で「夢應」となるので、「夢應の鯉魚」の「夢應」につながっている。

それから、『古今著聞集』[11]巻十一の「成光閑院の障子に鶏を畫く事」、『本朝画史』の巻二および『今昔物語集』の巻十三、巻二十の説話も、僧興義のモデルになっていることが明らかにされている[12]。そのほかに、重友毅氏の指摘によれば、琵琶湖めぐりの描写は『好色五人女』巻三の「中段に見る暦屋物語」に見られるおさん、茂右衛門二人の琵琶湖めぐりのくだりに拠っているという[13]。『御前御伽婢子』（都の錦、元禄十五年刊）の巻六「五条通にて水無瀬文治といへるもの死て魚に化し事」を有力な典拠とするのは後藤丹治氏の見方である[14]。なお、「魚服証仙」「魚服記」「薛偉」の類話の原話と思われる「張縦」という唐伝奇の存在、およびそれと「夢應の鯉魚」の関連は、後藤丹治氏の示唆に富む指摘により注目されるようになった[15]。

---

[10] 斎藤純「夢應の鯉魚考」（『言語と文芸』、２巻２号、１９６０年３月）。
[11] 元禄三年（１６９０）の流布本があるほか、明和七年に新たに刊行されたものもある。
[12] 勝倉壽一「「夢應の鯉魚」の構想」（『解釈』１９巻１月号、１９７３年１月）。
[13] 重友毅『雨月物語評釈』（明治書院、１９７０年８月１３版）２１５頁。
[14] 岩橋小弥太「雨月物語雑考」（『國學院雑誌』１６巻７号、１９１０年７月）にすでにその指摘が見られたが、後藤丹治「雨月物語の原拠二種について」（『学大国文』４号、１９６１年２月）でも『御前御伽婢子』を有力な典拠としている。
[15] 後藤丹治「「夢應の鯉魚」の原拠」（『国語国文』、１９５２年１０月）。

以上取り上げたのは、天明三年から今日まで説かれている「夢應の鯉魚」の典拠説である。要するに、「夢應の鯉魚」は、題名から考えても、内容から考えても、さらに秋成の翻案手法から考えても、その大筋を「魚服記」「魚服証仙」とその類話から採ったとするのは妥当な見方と言える。また、主人公のモデルは「貫休」の逸話から採ったと見てよかろう。そして、主人公を三井寺の僧侶興義に設定したあたりの典拠は、『古今著聞集』『本朝画史』『今昔物語集』などが有力な候補と考えられる。

三、典拠との異質性

「夢應の鯉魚」が話しのあらすじを「魚服記」と「魚服証仙」から借用したと考えられることは、上に述べたとおりである。そして、主人公の名前、身分、時代の設定は『本朝画史』から、鯉魚の絵に巧みで世間から評判を得ているという設定は「蛇玉葛子明」から、夢應の話そのものは「貫休」から、それぞれ部分的に取り入れ、あるいはヒントを受けている。しかし、作品としては、「夢應の鯉魚」は原話よりずっと優れていると言わなければならない。以下、主な典拠と比較しながら、典拠の取り入れ方をはじめ、秋成の翻案手法と独創性、秋成が作り上げた独自の作品世界などに焦点に絞り、考察を進めたい。

まず、典拠より優れていると思われるところについて見てみる。

（一）「魚服記」あるいは「薛偉」を読めば分かるが、そこには主人公の名前、出身、官職が出ているだけで、物語の展開の必然性と必要性につながる描写は見当たらない。つまり、魚になって意のままにあちこちの川や海を泳ぎ回ることができたのは、「夢應の鯉魚」の興義のように「放生の功徳」があったわけではない。一方、「魚服証仙」の場合でも、魚になって川の中を自由に泳ぎ回ることができたのは、主人公の周りの人たちが彼のために代わりに「放生」したためで、本人の自発的な善行ではない。従って、物語のその後の展開にとって、きっかけとなるような必然性の高い内容設定ではない。

臺灣大學學術期刊資料庫

なお、「魚服証仙」では、主人公の功績と徳行を褒め称える部分が長すぎるため、官僚臭いがあっていけない。これに比べて、淡々とした筆致で物語の発展をごく自然な形にするための伏線として、僧興義の飄逸な人間像と魚を放生する慈悲心を生々しく描いた「夢應の鯉魚」の方がより優れていると言うべきである。

（二）主人公が魚になって、自由自在に水中を泳ぎ回るという展開部分の描写も「夢應の鯉魚」の方が見事である。井上泰至氏の説によれば、この部分は魚になって遊泳している楽しみを描くと同時に、魚としての苦労も描いていると解釈できるという[16]。それはともかくとして、窮屈な俗世間での生活の中で、突然自分が熟知している魚、しかも自分の大好きな鯉となって、未知の世界に入り込み、その世界を悠々自適と泳ぎ回るというアイデア、夢か現かの心理表現、人間としての意識と魚としての意識が一つになる瞬間的な心理現象の描写などは、もちろん原拠からヒントを得たものである。

しかし、「夢應の鯉魚」におけるその描写の仕方は、原拠よりかなり優れている。とくに近江八景の景色を描く部分は、「近世の修辞文を代表する名文として知られている」といわれるほど[17]、数々の歌に詠まれている琵琶湖の風景を歌枕をつないだ描写で展開し、読者を別天地のしじまに誘う。読者はこれによって、しばらくは俗世間のことを心から追い払い、島々の間を、水の中を我とも知らずにさまよう。消えるかと思えばまた明るくなる漁り火、鏡の如く澄んでいる湖水、空に月がかかっている夜更けの海辺――何一つとして詩情に溢れないものはない。この一段があればこそ、「夢應の鯉魚」は読者を御伽噺のような不思議な世界に誘い、『雨月物語』諸篇の中で、例外的に暗さのない話だと言われるゆえんである[18]。

三島由紀夫は、『雨月物語』を愛読し、戦争中でも上田秋成全集を

[16] 井上泰至「夢應の鯉魚試論」(『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、１９９９年４月、２７３―２７７頁)。
[17] 鵜月洋『雨月物語評釈』(角川書店、１９６９年３月) ３０４頁。
[18] 日野龍夫「総説」(『雨月物語』、ほるぷ出版、１９８６年９月)。

臺灣大學學術期刊資料庫

持ち歩いていたほどであるが、わけても「夢應の鯉魚」と「白峯」を愛したという。「夢應の鯉魚は人間の羈絆を脱して鯉に化した僧の目に映る絶美の自然をゑがいてゐる」「鯉身の僧侶の目に映る琵琶湖の風光は、秋成の企てた究極の詩なのである」と、本篇の詩的な美を三島流の感性的な修辞法で説き明かしている[19]。かつて麻生磯次氏が指摘された、「原話はしばしば背景の叙述を欠いており、あるにしても簡略なばあいが多いが、翻案作では好んで地理的背景をそえ、その描写がかなり細密になっている」という近世翻案作品の傾向は[20]、「夢應の鯉魚」によって証明されたと言ってもよい。

（三）結びのところで、興義が天寿を全うして世を去ったこと、死ぬ直前に魚の絵を湖にばら撒き、その絵が本物の魚になって湖の中で戯れること、それで彼の絵が世に伝わらないこと、弟子の成光が師の神妙を伝えたことで有名であることなどが描かれている。これについて、井上泰至氏は、「死ぬ直前まで魚の絵への「執着」が消えることなく存していた」と解釈されている[21]。私見では、結末の部分で、秋成はまず興義の画技を形容し、それからその弟子の神技を引合いに出して強調の効果を狙ったとしか考えない。この人物の設定から、秋成の翻案手法の巧妙さを覗き見ることができる。つまり、画技に定評のある成光の師にまつわる言い伝えがあるのに着目し、紀伝不詳の興義を主人公にしたことで、それが全く虚構の人物ではなく、実在の人物であることを仄めかし、読者の共感を呼び起こそうとしたわけである。

さらに、僧侶という身分の設定も官吏よりはずっと飄逸的なイメージを与えるし、琵琶湖のほとりにある三井寺の僧侶を主人公に仕立てることによって、歌枕として名高い近江八景の美しい景勝地がおのずと舞台に設定される。「其終焉に臨みて画く所の鯉魚数枚をと

---

[19] 三島由紀夫「雨月物語について」（『秋成』、有精堂、１９７２年３月）。
[20] 麻生磯次「中国文学の影響」（『講座日本文学の争点 四 近世編』、明治書院、１９６９年３月、２３５頁）。
[21] 井上泰至「「夢應の鯉魚」試論」（『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、１９９９年４月、２７６頁）。

臺灣大學學術期刊資料庫

りて湖に散せば、画ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が絵世に傳はらず。」という結び方で、興義の絵が後世に残されていない理由を説明している。そうすることによって、結尾は冒頭とうまく対応し、この話をあたかも実話のように思わせ、破綻のないものに仕上げることができた。「夢應の鯉魚」が典拠より優れているとされ、愛読される理由の一つはここにあると言えよう。

「白峯」における翻案ぶりから、秋成と庭鐘の翻案手法の相違、秋成の翻案手法に見られる独創性などがよく論じられるが、「夢應の鯉魚」も典拠に大きな変貌を与えたことで、秋成の独創性をよく示している。典拠の冗長で複雑な内容構成を凝縮させ、まるで一気呵成の構成にした上に、様々な修辞法を取り入れたことは、秋成が天才的な翻案者、物語作者であるばかりでなく、天才的な構成家でもあることを余すところなく示している。

四、モチーフについて

人間が魚になり、自由自在に水中を泳ぎ回るくだりのモチーフに関しては、いろいろな見方がある。まず、中村幸彦氏の所説を取り上げる。中村氏は次のように述べられている[22]。

> この作品は一見洒脱な名人逸話とのみ見えるけれども、やはり寓意はある。それは芸術家と現実生活の問題である。芸術三昧境は、鯉となって遊泳する時の興義であるが、餧えて食を求めんとすれば、人の好餌にかかって現実の手ひどい目に逢う。この著作当時の秋成は、火災による家財の消失によってこれまでの学問文芸三昧から初めて現実生活に直面した。こうした経験や反省は、彼の一身に必ずあったはずである。

中村氏は、要するに、魚になって自由自在に泳ぎ回るくだりの描写を、当時破産に追い込まれた秋成の現実生活に結びつけて考えて

[22] 中村幸彦『上田秋成集』（日本古典文学大系５６、岩波書店、１９６８年１０月第９刷、１３頁）の「解説」を参照されたい。

臺灣大學學術期刊資料庫

いるようである。同氏の所論の当否は、後ほどあらためて検討することにし、中村氏以外の説をいくつか取り上げ、検討を加えたい。まず、三島由紀夫の見方である。

> この鯉魚の目には孤独で狂ほしい作家の目に憑いてゐはすまいか。潮の水にその網膜の狂熱を冷やされて、一瞬の夢幻の偸安を許された魂がありのままに見た自然が展開するのである。魂の安息日が、この鯉の見た潮水のなかに息づいてゐるではないか。羈束をのがれた一個の生命が、深く透明な存在の奥底を、やすらかな愉楽をこめて覗き見る眼差が目に見えるやうではないか。

このように、三島由紀夫は、人間社会の現実の制約から解放されたい作家秋成の創作意図および開放感を味わうことのできたその時の愉楽を、「夢應の鯉魚」の寓意として読み取っている[23]。重友毅氏もこの物語の童話風の、一人の人間が一尾の魚と化して自由自在に水中を泳ぎまわる思いつきだけでも、われわれをさまざまな楽しい空想に駆り立て、それは「無数の制約の下にある人間にとって、それからのしばしの脱出、しばしの自由を思わせる、一つの象徴的な出来事である。」と述べられ、湖中の遊戯の詩的幻想をほしいままに描いたことがこの作品のもつ魅力の根元である、と説かれている[24]。

一方、高田衛氏は、「日本では仮死―夢―蘇生譚は、たいてい「地獄めぐり」の趣向をともなったけれども、秋成はこれを水中世界の楽園幻想に置き換えた。」と述べられ、さらに「琵琶湖の風光は「究極の詩」かもしれぬが、夢の中の分身という主題に沿うた、凄惨な生の被害的現実として書かれている」という見解を示されている[25]。さらに、鷲山樹心氏は、秋成はこの作品の中で仏教の放生思想と芸道の神秘思想の微妙不可思議な因果関係を肯定する立場をとってい

---

[23] 三島由紀夫「雨月物語について」(『秋成』、有精堂、１９７２年３月、２４９頁）参照。
[24] 重友毅『秋成の研究』(文理書院、１９７１年５月）１９９頁。
[25] 高田衛『雨月物語評解』(有精堂、１９８０年９月）１８頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

る、と考えられている[26]。

なお、井上泰至氏は、「夢應の鯉魚」は殺生の戒めを悟るという仏教的モチーフをその根底に据えていた、と作品に仏教的色彩が非常に濃く出ていることを認めながらも、本篇にはもう一つのモチーフが内蔵されている、それはとりもなおさず、興義が僧侶にはあるまじき鯉魚の絵に対する「執着」を心に隠れて抱いていたのに、僧としての体面を保つために「生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に法師の養ふ魚必しも与へず」という偽善の台詞で人をすかす、そのような僧に対する作者の批判である、とも指摘されている[27]。同氏の見方は、作品に対する深い考察から導かれたものにちがいないが、殺生への戒めあるいは興義のような僧への批判が含まれているとする見方は、まだ検討する余地があるように思われる。また、従来の説は、『雨月物語』を秋成の儒教放伐論、仏教批判説の現われと見る観があるが、本篇の主人公興義に軽妙飄逸な人間像を賦与したことからみれば、秋成を仏教批判者と考えるのはいささか無理ではなかろうか。

ところで、鯉になった主人公が、知り合いの人たちの談笑裡に料理人に切り刻まれるとき叫び泣いていたのにもかかわらず、結局誰にも伝わることができなかった、という部分について、高田衛氏は、「実は人間同士の意志疎通の不可能性という、現実の人間性それ自体の酸鼻な原質の一面を「夢」として描きだす作者の幻視があり、それは浮世草紙体験をひとつの遺産として踏んでいるはずである。」と述べられ、前に述べた諸氏とは違う観点から、この物語のモチーフの本質を捉えようとされている[28]。最後に、森山重雄氏の見方を紹介しよう。仮死と鯉魚の化身に托したこのささやかな解放された

[26] 鷲山樹心「『雨月物語』の儒、仏二教観」(『上田秋成の文芸的境界』、和泉書院、１９８３年１０月、２０１頁)。
[27] 井上泰至「夢應の鯉魚試論」(『雨月物語論―源泉と主題』、笠間書院、１９９９年４月、２６７―２７９頁)。
[28] 高田衛「『雨月物語』の世界」(『江戸文学と中国』、毎日新聞社、１９７７年２月、１６４頁)。

臺灣大學學術期刊資料庫

自由も、せいぜい琵琶湖畔の歌枕の範囲を出ず、やがてはふたたび束縛と不自由の人間世界につれもどされる。魚に化した自由は、わずかに餌の誘惑によって終るくらいの狭さでしかなかったのである。人間と魚の餌、ここにこの自己解放の矛盾したおかしみがある、と森山重雄氏は言われる[29]。まさにその通りである。

五、終わりに

以上述べてきたように、従来の説は主として本篇のモチーフを、人間が制約から解放された時の喜びと楽しみを示すものと考えている。一方、たとえ望みどおりに制約から解放されても、それがつかの間の夢に終わり、結局夢から覚めなければならない、というふうに捉えることもできる。私見では、上述した中村氏の「寓意」説に沿って考えれば、意のままに泳ぎ回るところの描写は、「夢應の鯉魚」の特に注目に値する部分であり、魚になった方が人間よりもずっと幸せであると思わせるほど詩情豊かで美しく描いているのに、読者は心を奪われるにちがいないが、誘惑に負けてしまっては身を滅ぼされるという河伯の戒めこそ本篇のもっとも重要なポイントである。『雨月物語』全篇を貫いているモチーフを考えるにあたり、これが重要な手がかりの一つになると思われる。つまり、「只餌の香ばしきに味まされて、釣の糸にかゝり身を亡ふことなかれ」という言葉こそ、作者が本篇を通じて表したい「寓意」を示すための言葉である。これは、「夢應の鯉魚」ばかりでなく、『雨月物語』諸篇に一貫しているモチーフであると見たい。

たとえば、「白峯」の崇徳上皇の場合、一国を動かす権力を手に入れようと謀反を起こしたために、島流しの憂き目に遭い、さびしく世を去った。これは、人間世界の栄耀栄華の誘惑に眼が眩んだ結果と言えよう。「菊花の約」の宗右衛門の従弟の丹治も、塩冶の恩を顧みないばかりか、経久の歓心を得ようとする一心で宗右衛門を城か

[29] 森山重雄『雨月物語・春雨物語』(創元社、１９５６年６月)。

臺灣大學藝術期刊資料庫

ら出られないように閉じ込め、その挙句に、左門に殺されてしまった。「浅茅が宿」の勝四郎の場合も、家を再興しようとする立派な志を持ちながら、地道に働きもせず、大金を儲けようと欲張るために、すべての家産を金に換え、女房を後に残し、都に出かけていった。これも視点を変えれば、物質的な誘惑に負け見境を失ったためと考えられる。

「吉備津の釜」の正太郎は、浮気で妻を悲しませたのみならず、改心と偽って妻から金を騙し取り、最後は妓女と一緒に蒸発し、結局、無残な死を遂げた。いわば女色つまり肉欲の誘惑に負けた話である。「蛇性の婬」の豊雄も、妖怪が化けた真女児の美貌に魅せられ、そのため、身に覚えのないことで咎められ、牢屋まで入れられたにもかかわらず、真女児の言葉を信じ、両親や兄夫婦の許可を得ずに真女児と結婚し、あやうく取り返しのつかない事態を招こうとしていた。最後は当麻酒人の諭しでやっと誘惑に打ち勝ち、身を滅ぼさずに済んだが、これも誘惑に負けた一例といえよう。そして、「青頭巾」の鬼僧も、「貧福論」の左内も、「仏法僧」の秀次もみな誘惑に負けた人間として描かれている。「夢應の鯉魚」、いや『雨月物語』諸篇を執筆するにあたり、前後の見境もなく一時の誘惑に負けてはいけないという戒めが、あるいは教訓的談義本から影響を受けた秋成の脳裏を去来していたのかもしれない。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

（引用した文献に関する書誌的情報は注に詳しく書いた。それ以外の主なものだけ挙げておく。）

浅野三平（１９８５）『上田秋成の研究』桜楓社

麻生磯次（１９７６）『江戸文学と中国文学』第５版　三省堂

坂東健雄（１９９９）。『上田秋成『雨月物語』論』和泉書院

日野龍夫（１９８６）『雨月物語』（日本の文学　古典編　第２４巻）ほるぷ出版

稲田篤信（１９８７）『秋成・語りと幻夢』（日本文学研究資料新集）有精堂

井上泰至（１９９９）『雨月物語論―源泉と主題』笠間書院

勝倉寿一（１９９４）『上田秋成の古典学と文芸に関する研究』風間書房

木越治（１９９５）『秋成論』ぺりかん社

桑原茂夫編（１９７２）『上田秋成―怪異雄勁の文学』（別冊現代詩手帖巻の三）思潮社

中村幸彦（１９５９）『上田秋成集』（日本古典文学大系５６）岩波書店

中村幸彦編（１９７１）『秋成』（日本古典鑑賞講座第２４巻）角川書店

中村幸彦ほか編（１９７３）『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』（日本古典文学全集４８）小学館

中村幸彦・高田衛・中村博保（１９９５）『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（新編日本古典文学全集７８巻）小学館

中村博保（１９９９）『上田秋成の研究』ぺりかん社

大輪靖宏（１９７６）『上田秋成文学の研究』笠間書院

李樹果（１９９８）『日本読本与明清小説――中日文化交流史的透視』天津人民出版社

高田衛（１９７２）「幻語の構造」『上田秋成　怪異雄勁の文学』思潮社

臺灣大學學術期刊資料庫

鷲山樹心（１９８３）『上田秋成の文芸的境界』和泉書院
山口剛（１９２７）『怪談名作集』（日本名著全集）興文社
楊家駱編・李田意校（１９７３）『醒世恒言』（衍慶堂本）世界書局

臺灣大學學術期刊資料庫